



富岡製糸場をもっと楽しむための豆知識をお届けします！

## 梁に残る白い線

東置繭所<sup>ひがしおきまゆじょ</sup>1階<sup>はり</sup>の梁を見ると、斜めの白い線があります。なぜこんな線がついているのでしょうか。

1872(明治5)年に建築された東置繭所の1階天井や梁は木摺漆喰塗<sup>きずりしっくい</sup>りで仕上げられました。これは漆喰の付着がよくなるよう、木摺と呼ばれる小幅板を狭い間隔で打ち付け下地とし、その隙間に入り込むよう漆喰を塗る工法です(図1)。

その後、漆喰が剥がれ、木摺も取り除かれると漆喰跡だけが残りました(図2)。これが梁に残る白い線です。

ところで漆喰塗りは日本の伝統的な工法ですが、木摺下地による漆喰塗りは近代以降の洋風建築の導入により普及しました。ただ明治初期において天井の仕上げに用いられた事例は少なく、富岡製糸場で東置繭所の痕跡だけでなく、西置繭所に現存していることは大変貴重といえます。西置繭所の木摺漆喰天井のうち下地が露出している部分を見ると、木摺が隙間なく設置されていることから本来の工法と比べて漆喰が剥がれやすい状態であり、当時の施工が未成熟であったことがわかります。

